

触媒懇談会ニュース

触媒学会シニア懇談会

地球一周の船旅から帰って

戸嶋 直樹

南半球で地球を一周する船旅をしてきた。2016年12月9日から2017年3月22日までの104日間である。その間、学会は勿論、各種委員会や会合等への出席もすべてお断りした。決断したのは2016年4月。若い時に地球一周の話聞き、是非自分もと思った。しかし、一人あたり1,000万円かかると聞き、自分には退職後にも無理かと思っていたが、ピースボートなら、その何分の1かで行けると聞き、決断した。本稿はその報告である。

ピースボートでの地球一周

皆様、ピースボートというのをご存知ですか。ピースボート (Peace Boat) とは、国際交流を目的として設立された日本の非政府組織 (NGO)、あるいは、その団体が主催している船舶旅行の名称です。早稲田大学の学生が1983年 (昭和58年) に設立し、アジア各地の人々と現地での交流を行い、国際交流と理解を図るという趣旨で始められた。当初はアジアをめぐるクルーズを行っていたが、1990年以降は世界各地をめぐる「地球一周の船旅」を繰り返し行っている。したがって、はじめ乗客は若者ばかりだったが、今では定年退職者が主です。たとえば、今回私が参加した第93回クルーズでは、

70歳以上が35%、60歳代が40%、そして0~50歳代が25%、最年少が7歳、最高齢が92歳、計約1,000人の乗客です。乗客の国籍は、ほとんどが日本人で、中国人が上海やシンガポールから60人余乗船した。クルーやスタッフも入れると世界20か国余から集まっている。船はオーシャン・ドリーム号 (パナマ船籍、総トン数: 35,265トン) で、船旅を運営・実施しているのは旅行業者のジャパングレイスで、NGO法人ピースボートが船内企画をアレンジしている。

さて、船は12月9日に横浜を出航、神戸を経て、上海、シンガポール、ポートルイス (モーリシャス)、レユニオン島 (仏領)、エホアラ (マダガスカル)、マプト (モザンビーク)、ケープタウン (南アフリカ)、リオデジャネイロ (ブラジル)、モンテビデオ (ウルグアイ)、ブエノスアイレス (アルゼンチン)、ウシュアイア (アルゼンチン)、プンタアレナス (チリ)、バルパライソ (チリ)、カヤオ (ペルー)、イースター島 (チリ)、パペーテ (タヒチ)、ボラボラ島 (タヒチ)、アピア (サモア) に寄港して、3月22日に横浜に戻ってきた。

船は、原則、早朝に港に着き、夜に出港。この間に、企画ツアーに参加するなり、自由行動で、自分に興味あるところを訪問する

ことになる。もし時間をかけて内陸まで出かけたければ、船がある港から次の港に移る間に、オーバークランドツアーに参加するか、自由行動で、飛行機を使って移動する。私は今回、各港での日帰りツアーの他には、船がマプトからケープタウンに移動する間に、クルーガー国立公園（サファリ、南アフリカ）、ビクトリアの滝（ジンバブエ）、喜望峰などを訪問する 5 泊 6 日のツアー、および船がカヤオに停泊している間に、マチュピチュとクスコを訪問する 2 泊 3 日のツアーを選んだ。この他にも、南アメリカ大陸でイグアスの滝訪問、ウユニ塩湖訪問など、また船が南極海遊覧中に小船で南極大陸に上陸といったツアーもある。

船の旅はゆっくりできるのが好いという人も居る。しかし、この船では、毎日いろいろな企画があり（ほとんどが無料）、興味あるものに参加していると、毎日忙しくて、うっかりしていると昼食の時間がなくなるくらいである。

以下私が訪問した先で、強く印象に残ったことの一部を紹介する。

上海の慰安婦博物館と中国人学生との対話

上海は、これまで何度も訪れているので、上陸する必要もないと思っていた。ところが、「上海師範大学慰安婦博物館の訪問と大学生との交流」というツアーの募集が船中であつた。ピースボートらしい企画で、一つぐらいそういう企画に参加するのもよいかと、これに付いて行くことにした。中国での慰安婦問題の取扱い、および中国学生との交流にも興味があつた。

博物館は、大学構内のビル 1 階の一角に「中国”慰安婦”歴史博物館」の看板を掛けて、

2016 年 4 月に開館したところであつた。中国の慰安婦、そしてアジア全体にいた旧日本軍の慰安婦を取り扱っていた。説明は、中国語、英語、日本語で書かれていた。私は恥ずかしながら、中国人慰安婦の存在を認識していなかった。その数は中国で 20 万人、世界で 40 万人と紹介されたので、その根拠を聞いたところ、暫くして返ってきた答えは、日本軍の文書に兵何人に慰安婦 1 人をあてがうと書いてあるので、当時の日本軍の数からすると慰安婦はこの数が居たことになるとの返事だつた。こんな数字がそのうちに独り歩きするのかと不安になつた。大学キャンパス内の博物館の前庭には、韓国の日本大使館前に置かれたものと同じ韓国の慰安婦像が、中国人の慰安婦像と並べて置かれていた（写真 1）。



写真 1. 上海師範大学の中庭に設置された”慰安婦”像を見るツアー参加者

さて、昼食後、上海師範大学の学生十数人と日本からの参加者二、三十人との間で対話集會がもたれた。はじめ中国側から、本日の対話は自由に意見を述べ合うようにしたので、録音・録画、メモ記録も禁止との発言があり、中国ではこの確認が必要なのか

と思った。それぞれの発言には、通訳が付いた。中国側からは、たとえば、「日本政府の対中国政策をどう思うか。」といった質問があり、それに対して日本側からは、数人からいろんな立場で賛否両論が述べられた。これに対して、日本側からの質問に対しては、中国側の誰かが答えると、それで終わり。それを補充する意見はたまに出るものの、反対意見はない。回答は殆ど中国政府が発表しているのと同じ内容であった。よく覚えて同じ意見が言えるなと感心するくらいである。折角、録音・録画禁止などと言っておきながら、自由な発言はやはり無理なのかと残念だった。

私も、政治的な発言は止めようと思い、情報の重要性を述べ、「先の大戦でも日本人は、十分な情報が得られずに、アメリカに勝つと信じ込まされて、戦争に突き進んでしまった。その失敗を教訓に、中国の若い人も情報をできるだけ幅広く集め、分析するよう習慣づけることが重要と思う。」と述べた。回答は期待していなかったが、「国それぞれに事情がある。その国に合った情報統制は必要である。」と、中国政府が言っているのと同じ答えが返ってきたのにはびっくりした。

子供の笑顔のよかったマダガスカル

インド洋の西の端、アフリカ大陸に着く直前に寄港したのが、マダガスカルである。世界で4番目に大きな島で、世界最貧国の一つである。地球歴史の早い段階でアフリカ大陸から分かれたので、動植物に固有種が多い。植物14,883種中80%が固有種、爬虫類235種中90%が、哺乳類の約200種中80%が固有種という。バオバブの樹も8



写真2. バオバブ街道の夕陽

種中6種が固有種である。

観光地として有名になった「バオバブ街道」は写真2のように、美しく珍しい景色を我々に見せてくれた。しかし、これも貧しさ故にできたものである。開墾のために森林に火を点けたが、バオバブの樹は水分が多くて燃えず、太くて切り倒せずに残ったものが、バオバブ街道を作ったのである。

貧しいにも拘らず、マダガスカルの子供たちの笑顔は素晴らしい。裸足で、ボロをまとって飛び回っているが、どの子どもどの子も笑顔で一杯である。常夏のこの国では、自然に実っている、バナナやパンの実を食べておれば、多分飢え死にすることはないのだろう。こんな国に資本主義経済を導入する必要はないのではないだろうか？資本主義経済が、子供たちに、「One dollar! One dollar!」と言わせている。しかし、この子らは、貨幣経済に組み込まれるよりも、むしろ裸で自給自足の生活を送る方が、ずっと幸せではないだろうか？そんなことを考えさせる光景だった。

虹の国、南アフリカ共和国

最初にも述べたように、船がマプトから

ケープタウンに航行する間に、私たちはオーバーランドツアーで、クルーガー国立公園とビクトリアの滝、そしてケープタウンで植物園、ペンギン繁殖地、喜望峰、マーケットなどを訪れた。

南アフリカのクルーガー国立公園に生息する動物の個体数は、インパラ 1,500,000 頭、水牛 27,000 頭、アフリカゾウ 10,000 頭、シロサイ 10,000 頭、カバ 3,000 頭、ライオン 2,500 頭、ハイエナ 2,000 頭、チーター 120 頭という。公園入口近くのホテルに 2 泊して、サファリツアーに 4 回出かけた。少人数に分かれて行動するので、グループによっては、動物を余り見ることができない場合もある。私たちは幸い、上記のうちチーター以外の全てと、その他いろいろな動物を見ることができた。どの動物も子連れでゆったりと過ごしていた。写真 3 にあるように、ライオンは車の直ぐ近くまで来た。身体を乗り出して写真を撮っていたが、後になって冷静に考えてみると、よく襲われなかったものだったと思った。晴れの日には暑く、雨の日には寒かったが、それぞれに応じて違った動物が見えた。たとえば、豪雨の日には、ブチハイエナを何度か見た。ハイエナは



写真 3. クルーガー国立公園のライオン

夜行性で、普通昼間にはあまり現れないが、豪雨で地面の巣穴が水浸しとなり、仕方なく姿を見せたものだという。

南アフリカ共和国の白人も黒人も、ネルソン・マンデラ初代大統領を大変尊敬している。ケープタウンでは、植物園をはじめ至る処に彼の銅像があり、お土産にマンデラ人形が売られている。アパルトヘイト政策を止めた南アで初代大統領に選ばれたマンデラは、1994 年の就任演説で、「黒人も白人も関係なく一緒になって、人としての尊厳が奪われることのない社会、我々のみならず、世界が平和になるような「虹の国」をつくろう。」と述べ、黒人と白人が協力する社会を目指した。それに対して、現在の政権は、黒人にも白人にも、全く評価されていない。白人の日本語ツアーガイドも「現大統領は、景気が良かった時は牢獄に居て、経済の仕組みを理解していない。南アの経済状況は最悪で、失業率が高く、犯罪が頻発している。南アは大好きだが、来年には、出来たら日本に、多分レユニオン島に逃げるだろう。」と話していた。旧黒人居住区ソウェト出身で国際賞も受賞している黒人写真家、ビクター・マトムも、ピースボートのインタビューに応じて「南アフリカの現状は憂うべきです。知識を持った政治的指導者がおりません。」と述べている。こんな現状も、現地を訪れて初めて実感することができた。

世界で一番貧しい大統領と呼ばれるホセ・ムヒカ氏の船への来訪

「世界で一番貧しい大統領」として日本でも知られているウルグアイの第 40 代大統領ホセ・アルベルト・ムヒカ・コルダノ(愛称エル・ペペ)が、オーシャン・ドリーム号



写真 4. オーシャン・ドリーム号で乗客を前に演説するムヒカ氏

のモンテビデオ寄港時に船を訪れて、われわれ乗客を前に演説した(写真4)。ムヒカ氏は2010年3月から2015年2月まで大統領を務め、退任後2016年4月に日本を訪問している。軍事政権が終わるまで13年間収監され、出所後、左翼政治団体を結成し、2009年の選挙で大統領に選出された。政策は中道左派路線を基調として市場原理主義を批判し続けた。報酬の90%を慈善事業に寄付し、自身は質素な生活を続けている。

彼を有名したのは、隣国ブラジルのリオデジャネイロで2012年6月に開催された「リオ+20国連持続可能な開発会議」で最後に行ったスピーチである。彼は船でもほぼこの時と同じ内容の演説をした。リオ会議のスピーチの概要が「世界で一番貧しいと呼ばれたホセ・ムヒカ 心を揺さぶるスピーチ」(国際情報研究会編、ゴマブックス株、2016年発行)に訳されている。出版社の許可を得て、その一部を以下に転載する。

「(前略) 本会議では、今日の午後からずっと、世界の多数派である貧困に苦しむ人々を救い出す道と思われている、「持続可能な発展」についてさまざまなセッション

が設けられ議論が行われていました。(中略)

私は、豊かさを最も大切に思う人々に尋ねたい。インドの全家庭が、ドイツ人の各家庭が持っているのと同じ数の自動車を持つようになったら、インドだけでなくこの地球はどうなるのでしょうか。たとえば、私たちが呼吸できる酸素は、どれだけ残るのでしょうか。(中略)

では私たち人類は、このグローバリゼーションをコントロールできているのでしょうか。実は、このグローバリゼーションにコントロールされているのではないのでしょうか。(中略)

いにしへの思想家たち、たとえばエピクロス、セネカなどの哲人はもちろん、アマゾン流域の先住民族であるアイマラ族も、「貧しい人とは、少ししか持っていない人のことではなく、際限なく欲しがる人、いくらあっても満足しない人のことだ」と口をそろえて言っています。これこそが、現代の文化の行き着く先を決めるキー(鍵)なのです。

(中略)

私の言っていることは、最も根本的なことです。発展は、物質に押しつぶされることではありません。幸福と対立するものであってはいけません。消費の落とし穴にはまってはならないのです。ベーシックな意味で幸福とは、人間の幸福、地上の愛、人間関係、子孫の養護、友人を持つことなのです。基本的必需品を持つことに、寄与するものでなければなりません。そのような幸福こそが、私たち人類が本質的に持っている最も大切な宝なのです。そこで私たちが環境のために戦うときには、人間の幸福と呼ぶものに最も重きを置くべきであることを忘れてはならないのです。」

上の文章を読んで、皆様はどう感じますか。ホセ・ムヒカ氏のスピーチは YouTube でも見ることができる。短い演説です。直接英語で聞いてみて下さい。船でのスピーチも、ウルグアイが農業国であることから説き起こし、上記と同じ趣旨で、ゆっくりとした説得力のあるものでした。

南米の大国 ABC とコンドル作戦

皆様は「コンドル作戦」と聞いて、どんな作戦か分かりますか。アメリカ合衆国の CIA（中央情報局）が取り仕切って、1970年代中ごろから 1980年代に行われた対南米の作戦です。南アメリカの大国、アルゼンチン、ブラジル、チリのほか、ウルグアイ、パラグアイ、ボリビアなどの国で、軍部がクーデターで独裁政権を樹立しました。彼らは、アメリカ CIA の支援を得て、反共を唱えてテロと虐殺を繰り返したものです。最近、アメリカでの公文書公開で、次々と真実が明らかにされているとアメリカ在住のコロンビア人研究者の Michael Joseph 氏が話していました。全体で約 5 万人の人が、拉致され殺されたということです。最も厳しかったのはアルゼンチンで、7,000～30,000 人が拉致されたという。アルゼンチンでは、行方不明者の母が、毎週、写真を持って大統領府のある五月広場に集まり、行方不明の子供や孫を探しながら、白いネッカチーフを巻いて無言のデモを繰り返しているそうだ。最近も、軍人の家に引き取られていた孫が DNA 鑑定で見つかったと聞いた。写真 5.1 と写真 5.2 は、ブエノスアイレスの大統領府（ピンクハウス）とその前の五月広場に描かれた白いネッカチーフの絵柄である。



写真 5.1 アルゼンチン大統領府



写真 5.2 大統領府前の五月広場の白いネッカチーフの絵柄

南アメリカの軍事独裁政権の反共政策とそれに伴う国民虐待の話、さらにそれにまつわる死の武器商人の話は、当時から聞いたことがあったことを思い出した。アメリカ合衆国の関与のうわさも確かにあった。しかし、CIA が実質的に支援していた話は知らなかった。それが今、公文書公開で明らかになりつつあるという。実際アメリカ合衆国は世界で悪いことも相当しているようである。しかし、それが闇から闇に葬られることなく、後年公開され、明らかにされるというのは、さすがにアメリカは進んでいると感心した。

静寂の世界、南極

今回の船旅の大きな目玉の一つが南極遊覧である。大型船で南極遊覧できるのは今回が最後との触れ込みだった。アルゼンチンの南端の町、ウシュアイアを1月31日に出発、ドレーク海峡を越えて、南極半島の中ほど、南緯64度47分西経63度04分に到達し、再びドレーク海峡を渡り、2月7日にチリの南端の町、プンタアレナスに着くまで、往復足掛け8日間であった。そのうち氷山が見える南極海に居たのは約2日である。

一年中風の強いドレーク海峡を渡るのに片道で1日掛かる。その間船は大いに揺れて、甲板に出ないようにといった放送が何度もあったが、私は結果的に船酔なしで済んだ。

小型船でドレーク海峡を渡り、南極大陸に上陸というオプション・ツアーもある。(このツアーだけで、一人で約100万円掛かる。)しかし、この小型船で海峡横断中に船内で倒れて骨折し、その後の船旅を続けることができず帰国した人が居た。以前には、打ち所が悪くて亡くなった人も居るとも聞く。南極に行くのも命がけである。



写真6. きれいなブルーに輝く南極の流氷

南極海ではいろいろな動物に出会える。ペンギンやアザラシは平らな流氷の上で遊んだり休んだりしている。鯨はあちこちで潮を吹き、素晴らしいジャンプを近くで見せてくれた。が、何といても一番の見ものは雪山であり、流氷である(写真6)。氷は透明できれいな淡いブルーに光っている。なぜ、こんなにきれいのだろうか？きっと、我々の普通に見る氷に比べ、密度が高いせいではないだろうか。浮いている氷は小さく見えるが、水面下には、水面上に顔を出している氷の10倍の体積の氷があると聞くと、その大きさにも圧倒される。

しかし、何といても南極の魅力は、その静寂さかもしれない。雪山と氷河に囲まれた湾内は、波もなく静かであった。その中で、船がエンジンを止めた時には、これが音のない世界かと思った。その中で声高にしゃべる人の声が耳障りに感じた。

高山病と向き合ったクスコとマチュピチュ

ペルーのマチュピチュは、行ったことのある人も多いと思う。海岸近くのリマから標高3,400mのクスコまで飛行機で一挙に登るので、高山病が怖いと聞いていた。予防薬は飲んでしたが、飛行機から降りたらゆっくり歩くこと、意識的に深呼吸をすることなどの注意があった。

高山病になったら、気分が悪くなったり、吐き気がしたりするのだと思っていたが、並んでいて突然倒れた人が居たのにはびっくりした。突然の失神である。下がコンクリートだったから、打ち所が悪ければ死に至る可能性がある。ガイドが「息をしなさい。深呼吸をしなさい。」と叫んで、近くに生え

ていたハッカを取って来て、揉みながら息をするようにと言っていた。そのうち酸素ボンベが運ばれ、暫くするとよくなった。

日本人が高山病を怖がるのに、現地人は高山病にならない。実際、現地ガイドの胸は厚く、肺活量が大きい。胸を触らしてもらったが、肋骨が大きく張り出していて、さすがだと思った。序にもう一つ、現地人ガイドの身体能力で驚いたのが、その視力の良さである。マチュピチュで、遠くの山の頂上に居る人の一人ひとりの動きが見えるのである。カメラの望遠でははっきり見えず、双眼鏡でやっと確かめることができたほどである。

クスコは「へそ」の意味で、インカ帝国の首都だったことはご存知だろう。マチュピチュに行くため、クスコは通るが、クスコ近郊のマラスの塩田を訪ねる人は少ないようだ。山腹に塩分濃度の高い温水が湧き出ている、インカの時代から、塩田が開かれ、今でも山の中で製塩が行われている(写真7)。夏の期間のみ、天日で製塩する白い塩田が広がる。ミネラルの多い良質の食塩がとれる。



写真7. ペルー・アンデスの山の中にあるマラスの塩田

絶海の孤島のモアイ像の物語

モアイ像はテレビでもしばしば放映されよく知られている。大英博物館にも、きれいなものが1体ある。日本の重機メーカーの株式会社タダノが、倒れていたモアイ像を、足掛け3年の期間と2億円近い費用をかけて修復し、立て直したことでも有名である(写真8)。

しかし、このモアイ像があるのは、南米大陸から3,700 km離れた絶海の孤島、イースター島(現地語でラパ・ヌイ島、チリ領)である。なかなか簡単には行けない。船でも、着岸できる港がなく、救命着を付けて小さなテンドーボートでの上陸である。とても1,000人の乗客を1日で上陸させることができないので、2日に分けての上陸となった。

そもそも、こんな絶海の孤島に人類がたどり着いたのは、いつだったのか。ラパ・ヌイ人は、オーストロネシア語族に属し、約5,200年前に台湾を南下し始め、フィリピン、インドネシア、西ポリネシアを通り、約2,000年前に東ポリネシアで分岐して、イースター島にまで渡ってきた海洋民族である。その時期は西暦4～5世紀以降で諸説がある。何れにしても、18世紀にヨーロッパ人が来るまで、孤立して石器時代を維持し、この巨石文化を生んだのである。5～8 mもある大きな石像は何を目的に作られたかよく分かっていないが、集落を守るためのものだったようだ。詳しいことが分からないのは、ロンゴロンゴ文字(絵文字)で書かれた資料がほとんど残っていないのと、文化を伝承しロンゴロンゴ文字を読むことができた当時の酋長や神官などの識字層がほとんど奴隷として連れ去られてしまったことによる。

現在のイースター島には大きな樹がなく、



写真 8. 修復された「アフ・トンガリキ」のモアイ像

全島が草原である。ここが草原になってしまったことについても諸説がある。人口爆発での食糧不足による森林破壊、ネズミの繁殖による食害、西洋人との接触の結果、などなどである。環境問題、経済発展など、現代社会の世界人類的課題にも通じるものがある。

タヒチのゴーギャンとサモアのステューヴンソン

南太平洋で船が寄港したのはタヒチとサモアである。タヒチはフランス領、サモアは独立国（国名：サモア独立国）である。タヒチはリゾート地として栄えており（写真9）、タヒチの人はもう少し独立性を高めてもフランスに所属していたと言っていた。一方、サモアは、タヒチに比べると、発展途上という感じであり、観光資源も少ないが、独立を誇っていた。サモア群島の東部にあるアメリカ領サモアとの併合は考慮外であり、経済的に結びつきが強いニュージーランドと同じ時間にするため、日付変更線をアメリカ領サモアとの間に移動させていた。（こ

の辺りの日付変更線は大変入り組んでいることを今回初めて認識した。）

さて、小見出しのゴーギャンとステューヴンソンであるが、ポール・ゴーギャン（1848～1903年）はフランス人画家で、タヒチでの作品が有名である。実際、タヒチには2度滞在し、2度目には、1895年から、1901年にマルキーズ諸島に移るまで、6年間パペーテ（タヒチ島の首都）に滞在した。しかし、タヒチの人々はゴーギャンを評価していない。それは彼がまだ若い現地人を妻とし、倫理に反する生活を送っていたからだと話してくれた。パペーテには、彼の記念館があるが、そこには一つも彼自身のオリジナルの絵はないとも言っていた。



写真 9. ボラボラ島（タヒチ）の美しい海

一方、ロバート・ルイス・ステューヴンソン（1850～1894年）は、「宝島」や「ジキル博士とハイド氏」を書いたスコットランド出身の小説家である。療養のため1890年サモアに移住、脳溢血で亡くなるまで5年間を同地で過ごした。サモアでは、島人に慕われ、島の争いを調停する仕事も引き受け、健康にも恵まれて、多くの作品を残した。彼は、今も島人に慕われ、尊敬されているとい

う。彼の邸宅は「ロバート・ルイス・ステューヴンソン博物館」として公開され、島の重要な観光資源になっている。

この博物館には、彼の父や祖父の写真が灯台の写真とともに飾られていた。実は、ステューヴンソンの父トーマス、祖父ロバートは、共に灯台建設を専門とする建築技術者だったのだ。しかも彼らは、明治の初め、日本の灯台をいくつも作っている。個人的な話になるが、私は山口の生まれで、最後の務めも山口東京理科大学だったので、過日、下関市角島にある角島灯台に友人を案内して出かけた。角島灯台は本州の西北端にあり、明治9年(1876年)初点灯した第一等灯台である。日本に5カ所しかない特大のフレネルレンズを備えている。訪ねた日が丁度灯台記念日で、屋上まで上がってレンズを見ることができた。その時たまたまレンズの足元に **Stevenson** の銘があるのが眼についた。係の人に、小説家の **Stevenson** と関係あるのかと尋ねたところ、彼の一族だという答えが返ってきた。その肖像画を遥かに南のサモアで見ることができ、息子が一族の仕事を誇りに思っていることを感じて、感慨に耽った。

おわりに

皆様、何か興味を持っていただけましたか。私にとっては、初めて訪ねるところばかりの船旅で、大変良い経験をしたと喜んでいる。ここに記したこと以外にも、いろいろ書きたいことがあった。自由を求めた奴隷たちのル・モン山(ポート・ルイス)、スパイスの中継基地:レユニオン、世界三大瀑布を比較、南米移民のその後、パタゴニア泥炭草原のトレッキング(ウシュアイア)、マゼラン

海峡入口での石油掘削、パタゴニア・フィヨルドとブルホ氷河、海に浮かぶ天の川:沖から見たバルパライソ、リマの天野織物博物館と「4分の1の奇跡」、タヒチで見た伝統農法、大洋に沈む夕日からの発信:グリーン・フラッシュ、ハンモックに揺られた船旅、などなどである。

是非皆様にも体験してもらいたい。若い人なら100万円以下で地球一周できる。実際、これで自分の進路が見つかったとか、霧が晴れたとか言っている若者が何人もいた。人生を迷っている、そんな若者にも勧めたい。

最後に、長い報告を最後まで読んでいただき感謝する。よろしければ、感想を筆者までお寄せいただければ幸いである。(筆者の E-mail : toshima@rs.tus.ac.jp)